

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 64

2011年5月

Special to the Newsletter

国立歴史民俗博物館展示 「アメリカへ渡った人々と戦争の時代」を終えて

村川 庸子

1. はじめに

2010年3月16日から本年4月3日まで（実際には3・11の東日本大震災後に閉館となり開期が短縮された）千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館（歴博）で開催されたアメリカ移民の歴史に関する特集展示「アメリカへ渡った人々と戦争の時代」に企画段階から参加した。博物館の展示を扱った経験は無く、不安もあったが、基本はこれまで学んできた歴史学的手法であろうと考えることにした。大学院の学生の頃に取り組んだ愛媛県の移民母村に関する研究（『アメリカの風が吹いた村：打瀬船物語』1987年）、研究員の頃の日米交換船帰国者に関する研究（『日米戦時交換船・戦後送還船「帰国」者に関する基礎的研究—日系アメリカ人の歴史の視点から—』1992年）と学位論文で取り上げた戦後送還に関する研究（『境界線上の市民権—日米戦争と日系アメリカ人—』2004年）、筆者の3つの研究を土台に、調査・研究の過程で得た、必ずしも論文の形にできなかった知見や思いを交えて展開させた。

博物館を訪ねるのは大半が一般の方で、日本では移民・日系アメリカ人の歴史は余り知られていない。そこで、一般の方のために通史的に歴史を俯瞰しつつ、歴史研究者にも何か新しい視点を提示したいと考えた。何よりも他の移民史に関する展示とは異なるものを目指したいと思った。その点で、ロサンゼルスの中米日系人博物館やJAICA 横浜の展示、山口県周防大島や和歌山県の三尾村（カナダへの移民が多い）の小さな展示館などを意識した。歴博に移民史の専門家がいなかったこと、担当者が非常に忙しく、また融通無碍な人物であったことから、自由な企画を盛り込むことができたことに感謝している。今回収集した資料は膨大で、説明したい物、展示したい物も際限が無かった。だが、現実にはパネルの数も字数も展示物の数も極端に制限される。「余裕をもって配置した方が見やすい」ということのある。結果として、数少ない展示物の中にいくつかのストーリーを複線的に織り込み、できるだけ多様な内容を語らせることにした。それでも語り切れない物が多く積み残された。

その展示が終了したということで、何をを目指したか、どのような考え方に基づいて構築し、何ができて、何ができなかったかをまとめる機会をいただいた。展示には盛り込めなかった思いも少し語ることができるとも知れない。論文でもなく、研究ノートでもなくてよい、と言っていたので、少々冒険的な書き方を試みた。初めての展示作りで、いろいろな方向から対象を眺めつすがめつ頭をひねっている著者の姿をご想像いただきながら、あるいは一緒に頭をひねりながらお読みいただければ幸いである。

2. 金魚の話

ところで、筆者が論文を書く際に心がけているのが研究対象の視覚化である。まずイメージを作り上げ、そのイメージをできるだけ正確に伝えるべく文章に落としていく。フィールドワーカーの特性でもあろうか。移民の母村研究でも米国の強制収容に関する研究でも、文字資料だけでなく、できるだけ現地を訪ねたり、関係者に面接を行ったり、写真や絵画を見ることでイメージを膨らませてきた。

筆者にこのような研究の手法を示して下さったのが大野盛雄先生（1925-2001 東京大学名誉教授・元東洋文化研究所長）である。イラン・アフガニスタンのフィールドワークに基づく農村研究で知られる方だが、西アジア研究に入る前、日本人の移民研究に関わっておられた。助手の時代に泉靖一先生（1915-1970）の下、周防大島の沖家室で行われたフィールド調査に参加されたこと、ブラジルへの移民船に監督として乗り組み、かの地で日本人・イタリア人・ドイツ人移民の生活を具に見る機会を得られたことなど、繰返し聞かせていただいた。亡くなられて久しいが、フィールドでの経験など身振り手振りで楽しげに語られるご様子は、今も鮮やかに眼前に浮かぶ。特にこれからご紹介する金魚の話は、歴史研究を続ける過程でも、或いは学生に講義をする中でも有効で、今回の企画を作り上げていく作業を支えてくれたのもこの考え方である。まずこの金魚の話を紹介するところから本稿を語り起こしてみたい。

社会科学では対象を様々な角度から見る必要があるということは異論の無いところであろう。金魚鉢を持ち上げる格好をして「正面から見、真横から見、上から見、後ろから見…」最後に、高く差し上げて「お腹も見るとニヤリと笑う先生の顔が浮かぶ。「でも、それだけじゃないんだね。見ている自分が何者で、どこに立っているかということが大事なんだ」。人間として金魚鉢を上から覗き、横から眺めるのは当たり前である。時には鉢の中に飛び込んでみる。その時の自分は何かと問いかける。仲間の金魚か、ミジンコのような金魚の餌か、底の石か、水草か、それとも泡か。立場によって金魚の見え方は全く異なるはずである。観察する対象だけでなく、同時に観察者である自らも相対化することが必要だということである。

だが、この、対象との関係性や接近角度・距離を認識することは言うほど容易いことではない。日本人移民・日系アメリカ人の歴史を日本人研究者が扱う場合には特に難しく、時に彼らを過度に自らと同一化し、ナショナリスティックな議論をしてしまうことがある。元々彼らは日本人で、何処へ行こうと、どれだけ時間が経過しよう日本人だと考えたがる。移民地での彼らに対する偏見や差別に対し、我がことのように怒り、日米の戦争の際には「二つの祖国」の間で引き裂かれるイメージを作り上げてしまう。そんな時、実は彼らはアメリカ人で、祖国は一つ、アメリカなのだと言われると、思わずたじろいでしまう。

逆に自らの立場を相対化することなく、アメリカ人研究者の目で日系人の歴史を分析してしまうこともある。後述するが、筆者は日米戦争中の強制収容政策の中で生まれてきた「不忠誠」者について研究してきた。彼らは永年、日本人研究者による研究の中でも周辺化されてきた。半ば冗談ではあるが、戦争中の米国にとっての「不忠誠」は日本にとっての「忠誠」ではないか、という妄言を吐きそうになることがある。勿論、筆者もそんな単純な議論をしようとしているわけではないのだが、彼らの存在を完全に無視するのも如何なものかと考えてしまう。

日本人の研究者仲間の雑談の中でよく出ることだが、「日本人には日系アメリカ人の歴史を真に理解することはできない」、「強制収容のことなどやらないで、出移民の研究をしてはどうか」などと日系人の研究者から言われた人は多い。日本人が外国史を学ぶ場合や、男性が女性学を学ぶ場合にもしばしば聞かれる問いかけでもあろう。無暗に腹を立てたり、「そんなことを言われても」と戸惑ったり、簡単に引き下がるだけでは足りない。日系アメリカ人の歴史を語る時も、自分の立ち位置を考えることで、この問いに何らかの回答を見つけ出さなければならない。今回の展示はこのような素朴な疑問に対する筆者の答えを模索する作業でもあった。

3. 移民展示の構成

前置きが長くなったが、今回の展示の構成と概略を説明しておこう。

右図は、展示の際に会場で配布された資料の会場案内図である。展示は時系列にI.「動き出す人びと」、II.「日米戦—排日運動・強制収容・送還—」、IV.「強制収容後の日本人移民・日系人とアメリカ社会」という三つのコーナーを設置した。(III.「占領期日本の外国人特派員」のコーナーはここでは省く。)

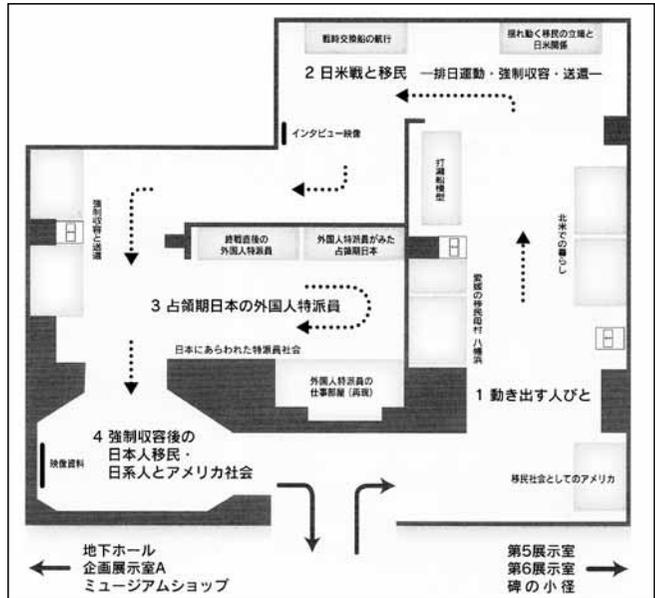
Iの「動き出す人びと」のコーナーではまず、移民の国アメリカにおける日本人・アジア人移民の特性、日本人の海外移住の時代別・出身地別・目的地別特性を明らかにし(パネル「移民社会としてのアメリカ」、次に「愛媛の移民母村:八幡浜」と「北米での暮らし」の二つを通路を挟んで並置した。出移民・入移民の事例として愛媛県八幡浜市とこの地の初期の移民が多く定住したシアトル・タコマ等を探り上げ、移民送出の社会経済的背景と移住地での生活の状況を示した。歴博所蔵の海外渡航の手引書や、双六(米国での経済的成功か錦衣帰国かで「上がり」になっている)等に加え、「アメリカ村」と呼ばれた母村に残されていた移民の持ち帰り品(バッグや靴、帽子など)や写真(洋服を着た子供や人形など)、移住地の家族・親族の無事を祈ったアメリカ講関係の文書等の現物資料も展示した。

このコーナーで移民の母村として愛媛を採り上げたことを意外に思われる方は多いであろう。広島、山口といった所謂「移民県」のように多くの移民を送り出したわけではない。だが、この地からの「移民」第一号と言われる西井久八は日本人移民のパイオニアの一人であり、その後、近隣の多くの村人を呼び寄せている。移民の総数は必ずしも多くはないが、日本政府の移民制限や米国の移民法で移民全般が抑制される中で、「密航者」を多く出した土地でもある。密航の中でも特筆すべきは打瀬船と呼ばれる、内燃機関を持たない、平底の木造の帆船による密航が試みられたことである(会場には八幡浜市役所から借用した船のレプリカも展示した)。移民の初期から正式の渡航の道が閉ざされた後まで、他よりも長い期間、北米への「移民」活動が行われた地域ということになる。

この地域はかつての筆者の調査で「移民=貧困」理論が必ずしも妥当しないことを裏付ける資料を見つかることができた地域でもある。リアス式海岸の段畑地域で貧困と結びつけられやすい土地であるが、明治期、それを補うように養蚕、柑橘など換金作物の栽培、綿織業や煎子、製蠟などで栄えた。村議会の県税戸数割表の分析でも、最下層からの移民はほとんど出していない。恒常的な貧困よりも経済的な浮沈が移民送出の契機になったと思われる地域である。

村々の神社で移住地の人々の安寧を祈るアメリカ講の集まりが最近まで行われているなど、移住地との関係も未だ続いている。資料調査に同行した歴博の事務官が「アメリカ村っていうけれど、普通の村じゃないか」と思っていたけれど、一旦、村の人が話し始めると、『サンフランシスコにいる妹が』とか、『去年、シアトルへ行ったときに…』とか自然に出てくる。「アメリカがとても近くにあることに驚いた」と語った言葉が印象的だった。

IIの「日米戦—排日運動・強制収容・送還—」には「揺れ動く移民の立場と日米関係」「戦時交換船」



と「強制収容と送還」という三つのコーナーを設けた。

「排日運動」のコーナーでは、日露戦争を機に激しくなった米国の排日運動と1924年移民法をめぐる日米関係、関係修復を目指した人形使節の交換を採り上げた。排日運動が燃え上がるきっかけを示すものとして、最近盛んになった日露戦争の世界史的意味を問う研究から風刺漫画の一つを紹介しておいた。映画館でアメリカ、フランス、ドイツといった西欧列強が日本とロシアの戦争の映画を見ている図である。ロシアの極東進出を警戒していたアメリカが、戦時中は判官贔屓もあって心情的に日本に加勢していたが、日本の勝利を機に反日に転じる、移民排斥の気運も盛り上がるという見方が一般的だったが、ドイツのウィルヘルム二世が黄禍論を唱え、それが世界に、引いてはアメリカの日本人移民にも影響を与えるという話には議論の飛躍があると以前から感じていた。日露戦争直前に世界的に通信網が整備され、活動写真が実用化され、極東の戦争がリアルタイムで世界に報じられた、世界の注視の中の日本の勝利であった、という指摘が筆者の中で初めて、日露戦争とドイツ皇帝の黄禍論、アメリカの排日運動を結びつけてくれたのである。

開戦後の「戦時交換船」のコーナーは学者・新聞人・留学生等に関する資料が中心であったが、戦時交換に一般の移民が含まれるようになった経緯や交換船のニュースが収容所にどのように伝えられたか、等の資料や写真が挿入された。

「強制立退き」のパネルには、しばしば他の博物館や写真集で紹介される日系人の苦境を示す写真・資料に加え、周辺のコミュニティの様子を伝える写真も採り入れた。日本人の友達と肩を組み幸せそうに微笑む白人の男の子と、シアトル沖のベインブリッジ島にある高校の1942年と43年のクラス写真である。前者は日本人の強制立退きの直前の写真であり、後者は強制収容で学生数の3分の1が減じている。突然仲良しの友人を失った少年は、多くの同級生を失った多感な高校生たちは、何を感じたのだろうか。

かつて、ワイオミング州のハートマウンテン、アーカンソー州のローワー収容所の跡地を訪ねた時のことを思い出した。戦争当時、ハートマウンテンの収容所内の病院は州内で2番目に診療科や設備の整った施設であったという。ローワーの女性市長は若い頃、突然、近くに日本人の収容所が作られ、周囲には無い電気・上下水道などのインフラが整備された時の驚きを語ってくれた。「そんなに酷い目にあった人たちだということは知らなかったから…」彼女は申しわけなさそうに目を伏せながら語った。収容所に入れられた日本人・日系人に対し厚遇が過ぎるのではないかという投書が殺到した、という文章も、こういう状況ならばある程度理解ができる。既に故人となった米国立公文書館のアーキヴィストのジョン・テイラーも若い日に収容所に入れられた友人を訪ねた経験から、積極的にリドレス（補償）を支持したと語っていた。米国社会に差別や偏見があったのは確かだが、それだけでは説明の足りないものが一般のアメリカ人の側にあったことも触れておきたいと考えた。

このコーナーは、シアトル沖のベインブリッジ島にある、小さな博物館の日系人関係の展示や一世パイオニア博物館（竹村義明氏所蔵）から資料を借用した。余談になるが、今回の展示では、日米の、個人所蔵の資料を多数展示してもらったが、博物館の展示というものは原則として、博物館同士の資料の貸借で行うものであり、今回の措置は特別な配慮によるものであったと後になって知った。

「強制収容と送還」のコーナーの説明は後項に譲る。

Ⅳの「強制収容後の日本人移民・日系人とアメリカ社会」のコーナーはパネルとビデオだけの展示であった。戦後のアメリカ社会への「再定住」、1980年代以降のリドレスに加え、9・11後のイスラム系住民に対する差別や偏見に対し、連携する日系社会を描いたビデオ『*Caught in Between* ～故郷（くに）を失った人々』(by Lina Hoshino, 2004) を配置した。

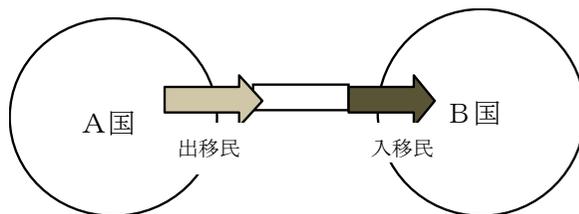
4. 展示で目指したもの

最後に、この展示の中に筆者が盛り込もうとしたストーリーを立ち位置を意識しながら謎解き風に解説しておきたい。

出移民研究の意味：連続性

まず、出移民研究の意味、入移民研究との関係性について述べてみたい。

説明の前に、「出移民 (emigration)」「入移民 (immigration)」という二つの用語の意味を説明しておこう。移民とは一般に労働目的である国から他の国に移動する国際的な人の移動の一形態である。A国を出ていく段階を出移民、B国に入国してからを入移民と呼ぶ。移民現象をA国から出ていく力（プッシュ要因）とB国から引き寄せる力（プル要因）のバランスという形で説明することも多い。通常、A国を出ていく移民とB国に入国する移民は同じ人々ということになる。



筆者のように、アメリカへの移民を両側から見てきた者にとっては、日本に限らず、出移民と入移民の研究には明らかな断絶が見られるように思われる。日本側では日本人の出移民は主として日本の社会経済史の分野で行われ、移住地での生活環境についてはほとんど関心が払われない。この無関心は移民を「棄民視」する見方が土台にあるようにも思われる。移住先での日本人・日系人の歴史はアメリカ史・日米外交史の専門家の領域となっており、排日運動や戦時中の強制収容などにのみ日本と関係する部分に関心が集中している。他方、移民の受入国アメリカ側の研究者の関心は移民の労働力としての経済価値とホスト社会の負担のバランスにのみ置かれ、移民が母国でどのような社会経済的背景を持ち、どのような事情で母国を離れたのかについても、帰国後にどのような状況に置かれるのかについてもほとんど注意は払われない。一国史的研究の限界であろうか。

近年、日本でも外国人労働者をいかに遇するかが問題になっているが（3・11後はかなり状況が変わることも考えられるが）、彼らを人として捉え、彼らの「移動」をトータルに理解することが全ての始まりであるように思われるのである。

強制立退き・収容政策の歴史研究：ナショナリズムを超える

「収容と送還」のコーナーは筆者にとって最も挑戦的な試みを盛り込んだスペースであった。日本では、日米戦争に巻き込まれた日本人・日系アメリカ人を「二つの祖国の間で引き裂かれた存在」とする捉え方が多く、しばしば日系人を戸惑わせてしまう。最良の引き出し、或いは語り手が単に対象に自らの姿をオーバーラップさせているだけなのかも知れない。他方アメリカ側では、ロサンゼルス全米日系人博物館や改装前のスミソニアンアメリカ史博物館の展示のように、第100大隊・442部隊など日系兵士の活躍を強調するものが多く、筆者が研究してきたような No-No Boy や米国市民権者、戦後日本への「帰国」者など、全く逆の反応をした人々に余り関心が払われない。

今回の展示において筆者は、敢えて「忠誠」者と「不忠誠」者を並置することを選んだ。先述の通り、筆者は永年、収容政策の中で行われた忠誠登録で米国への忠誠を表明せず（No-No Boy と呼ばれる）、北カリフォルニアのツールレーク収容所に隔離され、その後、米国の市民権を放棄して戦後日本に送還された二世に関する実証的な研究を続けてきた。戦後、この政策が批判的に検証され、1980年代以降、政府による正式な謝罪とリドレスが行われたが、リドレスに向けた日系社会側の同化戦略と、それを支える形で構築された日系アメリカ人の主流の歴史の中、これらの人々を不忠誠者だとする見方は変わらず、周辺化・不可視化されてきた。

だが永年このような人々に対して行った面接などを通して、これらの人々が単純に米国に「不忠誠」、

あるいは日本に「忠誠」であったわけではなく、アメリカの「民主主義」に期待すればこそその反抗であったという印象を強く持つようになった。そもそも日本人・日系人は不公正な扱いを受けても、お上の命令には従う傾向が強い。筆者の面接に応じてくれた人々がいずれもかつてアメリカの民主主義に対する期待を持っていたこと、その民主主義の国で自分の市民権が侵されたことに強い怒りを感じたと主張していた。そもそも日本人が国民としての権利を意識するようになるのは戦後のことであり、日系社会でしばしば言われるのは「波風を立てるな」「我慢」という言葉であったと言われる。米国政府の明らかに不公正な政策も忍従した一般の日系人は寧ろ日本的で、逆に、本件でいう「不忠誠」者が市民としての権利を主張した態度はアメリカ的なように思われる。

今回、日系兵士と市民権放棄者・戦後送還者を対置したのは親米と親日を対比したわけではなく、寧ろ、当時の日系社会の中に同根の、国家の不公正な取扱いに対する二つの対照的な反応を描きたかったためである。

敵性外国人政策：日系アメリカ人の例外主義を超える

先項でNo-No（忠誠登録）、市民権放棄、戦後送還の三つに言及したが、実は研究の最終段階で改めてこれらの政策の担当官庁が一従って、政策の目的が一異なることに気づいた。忠誠登録が陸軍省と戦時転住局（収容所の運営を担当）の政策であったのに対し、市民権放棄と戦後送還は司法省の敵性外国人政策の一環であり、国内の治安維持のために、日米戦争中に米政府に強く反抗的な態度を示した二世を「外国人化」し、日本に「送還」する政策であった。しばしば言われるように、陸軍省の政策は基本的にドイツ系・イタリア系に対しては日本人のような集団ベースでは適用されていない。ドイツ人・ドイツ系は第一次大戦中に差別を受けたが、その時の反省を踏まえて第二次大戦中はこれを避けることができた、と考えられてきた。だが、司法省の敵性外国人政策においては、第二次大戦中についても、少なくともドイツ人に関しては、一部の帰化市民に対する帰化取消が行われ、日本人とほぼ同数の国外退去処分が行われている。日本人・日系人を例外として捉える視点が、政策の継続性、普遍性から我々の目をそらしてきたと言える。

日本人・日系アメリカ人の歴史だけを見ては捉えきれない、時代や民族を超えてアメリカという国が抱える問題の普遍性、継続性、連続性のようなものがある。日本人・日系アメリカ人、あるいはアジア系アメリカ人を、個別に取り出して語るのではなく、この社会システム全体の中でこれを位置づけて語ることはできないか。この議論は未だ筆者の頭の中でもまとまってこない。今回の展示ではほとんど叶えることができなかったが、この問題は展示の開室のシンポジウムのテーマに据え、ワシントン大学のS. スミダ博士に「日系アメリカ人の例外主義（Japanese American Exceptionalism）」と題する講演をしていただいた。天理大学の山倉明弘先生にもコメンテーターとしてご参加いただいたのだが、その内容については現在取り纏め作業中であり、別稿に譲りたい。

5. 終わりに：定点観測の試み

いくつかの時代に分けて、展示の背景にあったものを説明してきた。最後に特定の地域、特定の人物について時代を超えた「定点観測」を試みたい。歴史研究というもの、特定の時代や事象を限定的に取り上げたものが多く、一つの地域を採り上げて長期の定点観測をして見せるのは地方史か、特定の時代・事象の背景として扱う場合だと考えていた。その考えを変えてくれたのが、ベインブリッジ島博物館での資料収集であった。

シアトル沖のベインブリッジ島はロサンゼルス島のターミナル島と共に日米戦争中の強制立退きの際、いち早く立退きを迫られた場所として知られている。島内に無線基地があったため準備期間もほとんど認められない立退きである。シアトルに渡るフェリーに乗り込む人々が栈橋を渡る写真、幼子を抱いた

若い母親の不安げな様子の写真は広く知られている。だが、この島で地方紙を発行していた人物が日系人立退き反対のキャンペーンを繰り広げ、戦中もこれを継続してくれたために、戦後の再定住が順調であったという話は余り語られていない。博物館には日系人と島に残った友人との間で交わされた心温まる手紙も残されている。元々、世界最大と言われた島内のポートブレイクリィ製材所では初期の日本人移民(多くが商船の船員で米国で船を降りた者)が働いており、1920年代には小さいながら日本人コミュニティもできていた。強制立退きの場面だけを切り取るのとは異なる図柄が浮かんでこないだろうか。

同じ手法で、愛媛県からの初期の移民の一人に山下宅治(1874-1959)という人物に注目してみよう。1902年にワシントン大学法学部を卒業し、司法試験に優秀な成績で合格するが、「帰化不能外国人」であったことを理由に州最高裁により弁護士になることを拒否される。それでも彼は怯まない。1922年には法学部で学んだ知識を活かして、連邦最高裁判所にアジア人一世に農地の取得を禁じた外国人土地法の違憲性を問う裁判を起こしている(*Takuji Yamashita v. Hinkle, Secretary of State of Washington*)。弁護士への道を閉ざされた山下はシアトル市内や近郊でレストラン・ホテルを経営し、牡蠣養殖などの事業にも取り組むが、その財産も強制立退きの際に失うことになる。日本人移民の差別に翻弄された人生であったと言えるが、果敢に戦い続けた人生とも言える。彼が手がけた敵性外国人法に関する最高裁判決がリピールされたのは1966年、彼を法曹界から締め出したワシントン州最高裁判所がこの決定を翻したのは2001年3月1日のことであった。展示では山下が渡米の際に志を記した「遺書」と題する書類を展示した。

展示の最後のコーナーについても触れておきたい。日米戦争後、様々な社会的な障壁はあったが、日本人・日系人は少しずつアメリカ社会への再定住を果たした。日米関係の好転もあって、70年代にはサクセス・マイノリティ、モデル・マイノリティと呼ばれる社会経済的な位置を占めることにもなった。そして、一般には強制収容の歴史は1980年代以降のリドレスで終わったと考えられている。

確かに日米戦争中のアメリカ人の人種問題に対する考え方を変える一定の役割は果たしたものと思われる。過去の、日本人・日系アメリカ人という一エスニック集団に対する不公正に対する謝罪は終わったかも知れない。だが、9・11後の同時多発テロ後のイスラム系住民などに対する対応は、「過ちは繰り返さない」という約束が必ずしも絶対的なものでない、ということを感じさせた。展示の最後に配したビデオ『*Caught in Between* ~故郷(くに)を失った人々』(Lina Hoshino, 2004)は9・11テロ後のイスラム系に対する差別と偏見に対して連帯した日系アメリカ人コミュニティの様子を伝える。今回の展示がこの時点で終わらない、そんな含みを持たせておくためであった。

最後に、今回の展示は終了したが、移民に関するパネルは八幡浜市教育委員会に譲渡されることになった。常設の展示館などは無いが、今後、様々な機会に巡回展示のような形で活用されることになっている。移住地も代替わりで、移民に関する資料が散逸しつつある。そのような資料の受け皿にもなってくれるのではないかと期待している。

以上、筆者の関わった、歴博の移民展示について記してきた。今回の原稿のお話をいただいた時には、随分張り切って心の準備を進めてきたのだが、その後、3・11の東日本大震災で研究室の六連の本箱が倒れるなど意外に大きな被災を受けた。本人は落ち着いているつもりなのだが、いざ文章をまとめようとすると、言いたいことがなかなかまとまてこない。ニューズレターの編集者から大幅な時間的猶予をいただいたのだが、この時点でもまだ少しずつ時間の引き延ばしをお願いする情けない状況にある。展示も最後にもう一度、見に行こうと思っていたが、震災後休館したまま、中途半端な形で終了してしまった。Good Excuseでないことは承知の上で、原稿執筆の機会をくださった山倉先生のご厚意に十分に答えられなかったことにお詫び申し上げたい。

(敬愛大学国際学部国際協力学科教授)

文学の中のアメリカ生活誌 (55)

新井 正一郎

Texas (テキサス州) この言葉は「友人、盟友」を意味するインディアン語からのスペイン語 *tejas*, *texia* からきている。テキサスの過去は劇的だ。メキシコ湾から太平洋まで広がるニュースペイン (New Spain, 1535年に米国のスペイン領を指して用いられたスペイン人の呼び名) 副王領の北方の辺境でもあり、メキシコの辺境であったテキサス (今日のテキサス州だけでなく、ニューメキシコ、オクラホマ、コロラド、ワイオミングの各州の一部を含んでいた) の植民の先駆けをなした一人が、スペインの遠征隊の隊長アロンソ・デ・レオンだ。17世紀末、彼は現在のテキサス州ウェチエスの北方にミッション (布教目的の農園) を建設しメキシコに戻った。帰途彼は川を渡るたびに水辺に連れてきたロングホーン (longhorn 「長角牛」、1857年の言葉) を置いていった。地勢が温暖且つ牛を襲う狼などがいなかったため、数年後には牛の大群がテキサスの平原を駆け回っていた。ミッションのフランシスコ会の宣教師たちは、スペイン王の臣下とみなされていたインディアンへの布教を行っただけだけでなく、彼等の貧しい暮らしを良くしようとして、ミッション保有の牧場でスペイン流の牧畜を教え込んだ。かくして騎乗を禁じられていたインディアンはスペイン風いでたち、つまりソンブレロ (*sombrero*, 帽子を指すスペイン語) をかぶり、皮製のズボン蓋 (*chaparejos*, 1861年) を着け、鉄製の拍車をかかるとに皮ひもでくくりつけ、馬に乗って牛の世話をすることでカウボーイ (*cowboy*, 独立戦争時代には英国王に忠誠を守るアメリカ人を指す蔑称だった) という貧しい労働階級のなかの準特権階級になった。因みにメキシコ人牧童はヴァケーロ (*vaquero*, 1800年に英語に入っていたスペイン語) と言った。1821年9月に旧スペイン領から独立を達成すると、メキシコは宣教師に忠実なメキシコ市民になるよう求めた。が、彼等の多くはこれを拒み、ミッションを去っていった。放棄された牛は、インディアンに所有されたり、あるいは1820年代初期からテキサスに入植してきた牧畜業に関心を持つアメリカ人の間で飼育された。

テキサスへのアメリカ人の入植は、コネチカット生まれの実業家モーゼス・オースティンによって始められた。もう少し言うと、彼はスペイン領ルイジアナの住民だったので、スペイン総督から統治を任されていたメキシコは、テキサスの緑豊かなプラズス川流域にオースティン植民地の建設を許可した。入植の条件はメキシコに忠実な市民になることと、カトリック教徒になることだったが、耕作と牧畜に適した広大な土地を無償で手に入れられるというまたとない機会に魅せられ、後に「古き300」と呼ばれる300のプロテスタントのアメリカ人家族が、南部綿花州から奴隷を連れて入植した。1821年12月、最初の開拓民が入植地に着いた時には、メキシコはスペインから独立していたので、その無住地帯にはメキシコ国旗がはためいていた。同年、父の入植事業を引き継いだ息子のスティーブン・オースティンは、メキシコ新政府から改めて許可を得る目的でメキシコに向かった。彼がそれを取得したのは1823年である (州都オースティンは彼の名をとったもの)。1820年代の前半には、新政府は幾人かのアメリカ人事業主にテキサス入植許可が与えた。その一つ、ゴンザレス植民地はテキサスのレキシントンと呼ばれている。その理由はインディアンの襲撃用に渡されていた銃を住民から、新政府がとりあげようとしたことへの不満から、テキサスの植民地としては、最初の住民の反抗運動が生じ

た地だからだ。やがて各植民地の人々は、新天地での新しい生活を友人や親戚に盛んに書き送ったので、大勢のアメリカ人が人口希薄な北部テキサスに押し寄せてきた。当時のテキサス住民3万のうち、メキシコ人は3千人程度だったが、アメリカ移民の数は約2万2千人にふくれあがっていた。1830年、メキシコ政府はアメリカ移民の急激な増加をみて脅威を感じ、移民の停止にふみきった。メキシコがテキサス独立の一因となるアメリカ人植民地の建設を認めた背後にはもとより理由がある。大規模な膨張を始めていた北アメリカ植民地と接するメキシコの北側の境界は、国防上重要な地域であったけれども、メキシコの国家軍の実態はかなりあやふやなもので、国を防衛するのに必要な武器のみならず、国境を警備する守備隊も絶対的に不足していた。新政府はオースティンによる移住者の導入という請願を許可すれば、ルイジアナからフランス人やスペイン人といったラテン系住民が移り住み、アメリカの脅威に対する防壁になるだろうと期待した。だが、この思惑は不成功に終わった。ラテン系の人々は移住運動を始めなかったからだ。

ところで、メキシコ新政府に参加したクリオーリョ（植民地生まれのスペイン人）の中には、国家をどう作っていくかということに腐心する者がいなかった。議会は地方分権派（自由主義派）と中央集権派（保守主義派）とのつばぜり合いがつづき、国家は安定性を欠いていた。政治体制が変わるたびに新政府が強いる過酷な政策は、アメリカ移民（テキサス人）を不安にさせた。だが、この時点での彼等には、まだ独立運動を起こすパワーはなかった。彼等がおこなったことと言えば、支援を求めてスティーブン・オースティンをアメリカに派遣したり、地方分権派の連邦共和国憲法（1824年）に支持を表明したことであった。かかるアメリカ人開拓民を一大変革に導いたのが、1834年の中央主権派に支えられたサンタ・アナ政権による連邦制の廃止である。彼等は享受していた自治権を失いかねないという思い強め、ついに武器蜂起した。1835年12月11日、テキサス軍はサンアントニオ市からメキシコ軍を追放し、一方的にテキサスの独立を表明した。が、翌年2月26日サンタ・アナ将軍率いるメキシコ軍が反撃にで、同市のポプラの木に囲まれた伝道所でもあったアラモ（Álamo、ポプラの木を意味するスペイン語）砦にたてこもった187人のテキサス人は一人残らず殺された。『草の葉』のなかに、この戦闘を著者（ウォルト・ホイットマン）自身がどう感じたかを語る一節がある。「誰一人も逃亡しなかった。（略）アラモでは150人の勇者が今もなお無言のままだ。」アラモ包囲戦の直後（4月21日）、テキサス独立軍総司令官サム・ヒューストンは1,600人の兵をひきつれ、サンハシントー川近くにいたメキシコ軍を奇襲し、サンタ・アナ将軍を捕虜にした。独立の一つ星共和国に脱皮したテキサスは、ジャクソン大統領の旧友サム・ヒューストンを大統領に選出し、1836年に奴隷州としてアメリカへの併合を申し出た。が、これを承認すれば、北部の奴隷廃止論者の反発を招くだけでなく、メキシコと戦争になることは明らかであったので、ジャクソン大統領も次のヴァンビューレン大統領もこの申請を先送りした。アメリカ議会がテキサス併合を可決するのは、1845年になってからだ。

（天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長）

Essay

食料主権、地域通貨、アグロエコロジー

森田 成男

普段マスメディアがあまり報道しない、アメリカの世界における3つの動きにふれたい。ホンジュラスに本部をおくピア・カンペシーナ（百姓の道）の食料主権の動向、アルゼンチンの地域通貨（資本に転化しない通貨）の経験から学ぶこと、そしてキューバやブラジルの有機農業（アグロエコロジー）の発展などである。それらは地球規模で迫り来る、これからの難局を迎え撃つ「備え」でもある。

1. 食料主権の動きについて

食料主権とは「国際市場に左右されずに民衆が自分の食物や農業を自分で定義する権利」のことである。したがって、農産物を単なる商品として流通させる貿易自由ではなく、国内農家を応援した方が国民の食料の安全が保証されると主張する。これは食べ物に関連する、国土や食文化の在り方にも及ぶ。自分たち独自の生活様式を選び守る権利であり、各国の民衆の生活様式を破壊するグローバリゼーションに対する根本的な否定の動きでもある。1992年にホンジュラスに本部を置いて創設されたピア・カンペシーナ（百姓の道）は、世界各地の自作農、先住民、農村女性、漁民らの百以上の組織が連合した会員2億5千万人が集まる世界最大の民間組織でもある。

例えば、その中核グループの運動体のひとつが「ブラジル土地なし農民運動」であり、1979年に農地を持たない労働者の集団が、いきなりキャンプを設立し、土地を耕したことから始まる。ブラジル憲法の「すべての土地は生産活動に利用されなければならない」を根拠に、未利用地を耕す権利を求め、現在では100万人以上が、ウルグアイの広さに及ぶ1,400万haもの農地を取得して耕している。日本流に言えば、働く場所もなく、行き場のない人々が耕作放棄地を開墾して自給自足の生活をするようなものであり、今では1,800もの小学校を建て、医療施設も自前でつくり、生活に必要なものを自力でまかなうまでに至っている。

2. 地域通貨でコミュニティを守る

アルゼンチンにおける地域通貨「RGT」は、2001年には会員が200万人に達したともいわれている。毎週、公民館などでバザーを開催しており、「クレジット」という紙幣型地域通貨を共通に使うことで大ネットワークを形成している。また、このアルゼンチンのサルタ州やトゥクマン州などでは、1985年から1990年代にかけて、独自の州債（州政府発行の借用証書）の形で自ら通貨を発行している。中央銀行が発行する「公式通貨」だけがマネーではない。世界では公式通貨と地域通貨が共存することが当たり前になりつつある。ドルや円などの公式通貨は権力の下に集まり、利益を求めて流入・流出を繰り返すが、地域通貨は地元の社会に留まり人と人をつなぎ、モノやサービスの交換を仲立ちする。日本においても北海道・栗山町のクリン、千葉市のピーナッツ、滋賀県・草津市の「おうみ」など、全国で30種類は下らない「自分たちのマネー」が存在する。補助通貨として公式通貨を補完するかたちで、地域社会の活性化に役立つからである。

米国の金融・経済の専門家のトーマス・グレコは、アルゼンチンにおいて、当時、州債という地域通貨が限定的に流通できたのは、地域経済が刺激されることに人々が気づいたからだ、と指摘する。実際に、米国ニューヨーク州の「イサカ・アワー」など世界の様々な地域通貨（資本に転化しない通貨）は、地域社会において、モノやサービスの支払い手段として、地域社会が活性化する契機となっている。

3. アグロエコロジーの進展

農業の持続可能性の基本は土壌の健康にある。従来 of 慣行農業では、農薬と化学肥料の多用による、有機物の消耗や動植物相の喪失などの複合的な要因で土壌が劣化してきている。キューバの国家的な農政の方向転換の、成果の実証の意義は大きい。吉田太郎の『有機農業が国を変えた』に詳しく描かれている。キューバの民衆の経験は、農薬と化学肥料多用の慣行農業に転換を迫るものであった。

有機農業は安全だけでなく、単収においても、

慣行農業より優れ、人口扶養力も大きい。それが今日、徐々に新たな常識になりつつある。認証有機農業は、アグロエコロジー（非認証有機農業）という巨大な氷山の一角にすぎないが、認証有機農業の面積でみても、世界のトップ10の中にブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、ボリビアなどが入っている。

以上の、食料主権、地域通貨、アグロエコロジーの進展の動きは、国民が将来にわたり生存するためのヒントでもある。グローバリズムに取り囲まれ、食の安全を守る体制づくりが進まない中、地域のコミュニティ単位で家族や隣人の生存を保障していく厚い備えが必要だ。民主主義の要は選挙の有無だけではなく、食料主権という食生活の様式に関わる地域住民の自治にある。例えば、愛媛県の今治市では、学校給食から、地産地消・有機農業・食育のまちづくりへと進んでいる。輸入小麦に使われるポストハーベスト農薬のマラチオンの基準値が、1992年に従来の数値から16倍の8ppmに引き上げられていることはあまり知られていない。国産の小麦は残留農薬基準が厳しく、収穫後のポストハーベスト農薬は使わないのでより安全である。今治市の学校給食では、有機米はもちろん、地元産小麦でつくったうどん、地元産大豆でつくった豆腐の供給がされ、食の安全が進んでいる。さらに、地元の有機農産物の生産が広がり、地産地消レストランや市民への直売所を通じて、コミュニティ内でお金が循環する「地域経済」活性的好循環につながってきている。

日本を含む多くの国々は、工業での立国を目指し、労働力が農村を離れて続けてきた。しかし、21世紀の今日、国民が食べるものは自分でまかなう時代に回帰してきている。海外からの安価な石油と食糧が入手困難となれば、農機具も動かせず、広域間の流通もむやみに動かなくなる。それを教育学者の小池松次は『餓死迫る日本』で、市民フォーラム事務局長の佐久間智子は『穀物をめぐる大きな矛盾』で、山田正彦は『小説日米食料戦争』で、いずれも冷徹に現状を掘り下げ、各種対策のヒントを提示している。

さらに、幸いに日本に生まれた私たちは、ご先人の石高制度（米が価値の基準でもあり、生存の基本）のシステムを経験してきている。私たちの生存を保障する米（モミ）は交換の手段として、過去に民衆の間で立派に通用してきたし、有事の地域通貨（補助通貨）の代表にもなり得る。モミ（米）は通常3～4年もつものであり、公式通貨が超インフレなどで崩壊の際、価値の保存・交換手段でもある。額に汗して生産された米や芋が、富そのものの時代に自然になっていくだろう。地産地消の原点は、家庭菜園、お裾分け、物々交換や各地にある朝市、直売所などである。当然に、全国の過疎地域の、放置された棚田や休耕田の有効利用が必要である。最近、定年退職後の団塊の世代による家庭菜園が増えてきている。安価な化学肥料、石油なしの時代が近いからだ。

弱肉強食の自由貿易体制に批判的な、ヴァンダナ・シヴァの『食糧テロリズム 多国籍企業はいかにして第三世界を飢えさせているか』によれば、米国の法律と西洋型の「知的所有権」をグローバル化するWTO（世界貿易機関）の合意によって、生物資源の略奪が推進されている。企業の特許取得過程を容易にする米国の法律には、一定の歪みが存在する。その歪みのひとつが「先行技術」の解釈である。その解釈によれば、世界の他の地域に同一の発見が既に存在し実際に使われているか否かに関わりなく、米国内で行われた発見についてなされた申請に特許が認められるのだ。米国特許法のこの部分（102条）が修正されない限り、新たな生物資源略奪の事例が発生し続けるだろう。私たちは先祖代々伝わる固有の種子を、次の世代に引き継いでいく必要がある。大地から地道に食料を生産する人々が、地域社会にリーダーシップをもって奉仕し、活躍する時代が来ている。昨今の就職難の折、農林漁業などの一次産業こそ社会基盤存続の要だということを若い世代に訴えたい。食料危機を経験したキューバから見えてくる「食料自給率」の大切さを噛み締めたい。アメリカスの世界から、地球と日本が学ぶことは多い。

（天理大学アメリカス学会会員）

3コースの最優秀卒業論文に

「酒本真理子賞」を授与

天理大学アメリカス学会では、去る3月22日の卒業式当日に恒例の「酒本真理子賞」をヨーロッパ・アメリカ学科の英米語、イスパニア語、ブラジルポルトガル語の各コースにおいて選出された最優秀論文執筆者に授与した。授与式は、卒業式式典直後に開かれた、上記3コースの各コース教員・卒業生が参列したクラス会の席上挙行され、以下の受賞者3人にそれぞれ賞状と図書カード2万円分の副賞が手渡された。

この「酒本真理子賞」は、1990年3月に旧外国語学部英米学科を卒業し、1年後に志し半ばにして白血病で亡くなった酒本真理子さんの名前を冠して創設された賞である。彼女の父親の酒本昌彦氏から、「後輩の育成とアメリカス学会の出版活動に役立ていただきたい」と毎年寄付を頂戴しているが、その一部を「酒本真理子賞」として毎年卒業式当日授与している。

英米語コース：吉田初穂

“Muslim Identity and Multiculturalism in Contemporary Canada: The Hijab Controversy” [英語論文] (「現代カナダにおけるイスラム教徒のアイデンティティと多文化主義—ヒジャブ論争をめぐる—」)

イスパニア語コース：吉原志織

「陽気ぐらし世界への行進—伝道ストラテジーとしての鼓笛隊活動の展開—」

ブラジルポルトガル語コース：小林辰大

「ブラジルのトロピカリアートロピカリアがブラジル文化にもたらしたもの—」

* * *

今年度のアメリカス学会の活動

単行本第5弾を発行予定

天理大学アメリカス学会の2011年度定例研究会は、7月16日(土)午後2時から天理大学研究棟3階の第2会議室にて開催する。研究発表者は後日発表する予定。また、恒例の第16回年次大会は12月3日(土)に開催予定だが、今年度は年次大会の開催日の発行を目指して、

アメリカス学会の単行本第5弾となる『アメリカス世界のなかのメキシコ』(仮題)を発刊する予定である。これは、昨年2010年が「日墨交流400周年」「メキシコ独立200周年」「メキシコ革命100周年」に当たる年であったことから、11月27日に開催されたアメリカス学会の年次大会においても「アメリカスのなかのメキシコ」という統一テーマのもとに記念大会を開催し、記念講演以外にも8名の研究者による発表、さらにはパネルディスカッションを展開した。この年次大会の研究成果を1冊の単行本として記念出版するための準備が着々と進められており、目下昨年の研究発表者たちが統一テーマに相応しい論文を執筆中である。また新たな視座からメキシコにスポットを当てる論文も掲載予定である。乞うご期待!

編集後記

☆天理大学アメリカス学会の2011年会計年度は、昨年11月27日に開催の年次大会当日にスタートしました。2011年度の年会費(一般会員:5,000円、賛助会員:1口30,000円)を未納の会員の皆様は、昨年12月にお届けした『アメリカス研究』第15号に同封しました郵便振込取扱票にて指定口座(下記参照)宛にお振り込みくださいますよう、よろしくお願い致します。郵便振込取扱票を紛失された方も下記の郵便振込口座番号宛てにお願いします。

口座番号:00900-5-70364

加入者名:天理大学アメリカス学会

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお寄せください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 64 : 2011年5月17日発行)

発行者:片倉 充造

〒632-8510 天理市杣之内町1050

天理大学国際学部外国語学科英米語専攻内

天理大学アメリカス学会

電話:0743-63-9076

Fax:0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/